

## 第2回 REMAP-CAP RMC、SAC、RCC ミーティング

日時：2021年3月10日（木）17:00～18:00（zoomにて開催）

参加者：藤谷、西田、舘田、新谷、國島、牧野、山下、中菌、斎藤、一原、鎌田、神代、保科（敬称略、順不同）

### 【議題】

1. RMC メンバーに藤田医科大学の山下千鶴先生が加わったことが報告された。
2. 資料に基づいて、進捗状況について斎藤先生、藤谷先生より説明が行われた。
3. 質疑応答が行われた。

藤谷先生

日本集中治療医学会、日本感染症学会から **endorsement** を頂いているが、どのような支援をいただけるかの説明があった。日本集中治療医学会からは、非治験の臨床研究に対して条件付きで支援の承認を頂いた。治験部分については、特定の製薬会社を学会が推奨という形には **COI** があるということで両学会とは切り離して研究をすることになっている。臨床研究においては、対象症例が重症、中等症の **COVID-19** であり両学会からの支援が必要と考えている。

西田先生

昨年春、日本集中治療医学会理事会直結の研究を支援する組織 **Japanese Intensive Care Research Group (JICRG)**・学会主導共同研究推進会議が設立され、**JICRG** において非治験部分の **REMAP-CAP** を支援する方向性である。

舘田先生

感染症学会では、今のところは **endorsement** をとっただけという状況だが、今後学会のホームページ等でアナウンスしてもらえれば、興味を持つ人は出てくると思う。自施設でやってみたい、アイデアがある等の意見が挙がってくるだろう。日本からの新しい発想やアイデアに世界が協力してくれるような一つのプラットフォームになっていくと良いと考えている。

西田先生

**REMAP-CAP** は非常にネーミングがよい。もし **REMAP-CAP** に興味があった場合、自施設で何ができるか、何をすればよいか。診ている症例が中等症か重症なのか等によって入れるドメインが違う等がある。チャート等で示してもらえると取り組みやすくなるのでは

ないか。

一原先生

まだ十分な資料作成ができていない状況ではあるが、現在は興味があればメールをいただくという仕組みとなっている。詳しく理解してもらえるよう、REMAP-CAPのわかりやすい資料をサイトに公開する、学会等の講演で説明する機会を作っていきたいと考えている。現在は最初の段階であり、顔のわかる施設、地理的にも近いところで担当の先生方に声をかけ、施設ごとに詳しく説明をして方針を決める、ということを行っている。その過程で質問が挙がっているため、FAQを作成している。より広く情報提供するしくみを育てていきたいと考えている。

藤谷先生

ホームページの充実をはかっている。研究デザインが複雑であり、ビデオを作り、研究についてわかりやすい動画と文書を日本語で作りたいと考えている。またAMEDで費用獲得ができれば、研究協力費についても記載、あるいはCROによるモニタリング等具体的なことも掲載したいと考えている。できるだけ理解してもらえるような工夫を今後も続けていく。

一原先生

サイトへの掲載だけでは十分ではないため、各学会を通じてご案内をしていきたい。学会のお力添えをお願いしたい。

舘田先生

学会で、臨床研究促進委員会を立ち上げた。学会会員のネットワークを使い、グローバルデータシェアリングを進めるような動きが2本走り出している。最初はコアの施設で最低限の症例数を確保し、それ以外はオープンな形で参加を希望してもらうように周知し、学会のデータをシェアするというのを研究の文化にしたい。日本はこの点遅れていたが、REMAP-CAPでグローバルの中で実践できるのは大事な方向性である。

一原先生

REMAP-CAPは研究のプラットフォームという位置づけで、国としてはパンデミックへの備えのシステムという役割がある。一部の人たちがやっているものであってはいけないと考えている。日本中の医療者が共有し、国民や患者にも理解してもらえる国民共有の資産にしていかなくてはならないと考えている。広く周知してオープンな運営ができることが重要だと認識している。

齋藤先生

グローバルレベルでは、まとまってやっているという印象を持っている。日本も REMAP-CAP が学会横断的に実施できるまたとない機会となっているため、all JAPAN 感を打ち出していきたい。

國島先生

REMAP-CAP が COVID 診療のみならず、学会の研究の在り方のブレイクスルーになり得るのではないかと考えている。All JAPAN だけでなく all WORLD で出来ればと思っている。

藤谷先生

ヨーロッパの RECOVERY、REMAP-CAP、NIH のアクティブな三組織の研究を統合しメタアナリシスなどが既に報告されてきており、世界が一つになって研究をしようとする動きが加速化してきている。日本もその波に乗らないと n 数で負けてしまう。関連学会に協力していただいて、大きくしていきたい。

一原先生

あるグループ、ある大学から報告が出た、ということをはるかに超越した国際共著が行われる、ということが COVID を契機に進んでいる大きなトレンドである。REMAP-CAP もその一つの形と考えている。重要な研究に参加、お互い評価していく、という研究の基本的なプラクティスにかかわってくる。

舘田先生

欧米には n で負けてしまうことはあるが、日本の先生方が、ヒントとなるような研究テーマを出してそれが世界で評価されて実るということをやっていきたい。まだ後手に回っているため、世界の動きに乗って追いついていき、その先には日本の現場から出てきたヒントが世界の治療法に結び付けられるようにしていきたいと思っている。

齋藤先生

日本から独自のプロトコルや介入を提示するということも AMED には来年度の課題として挙げている。先生方と一緒に日本のアイデアを世界に出し、世界に認めてもらえるようなところまでいけば相当なアチーブメントになるので、引き続き先生方とディスカッションを重ねたい。

以上